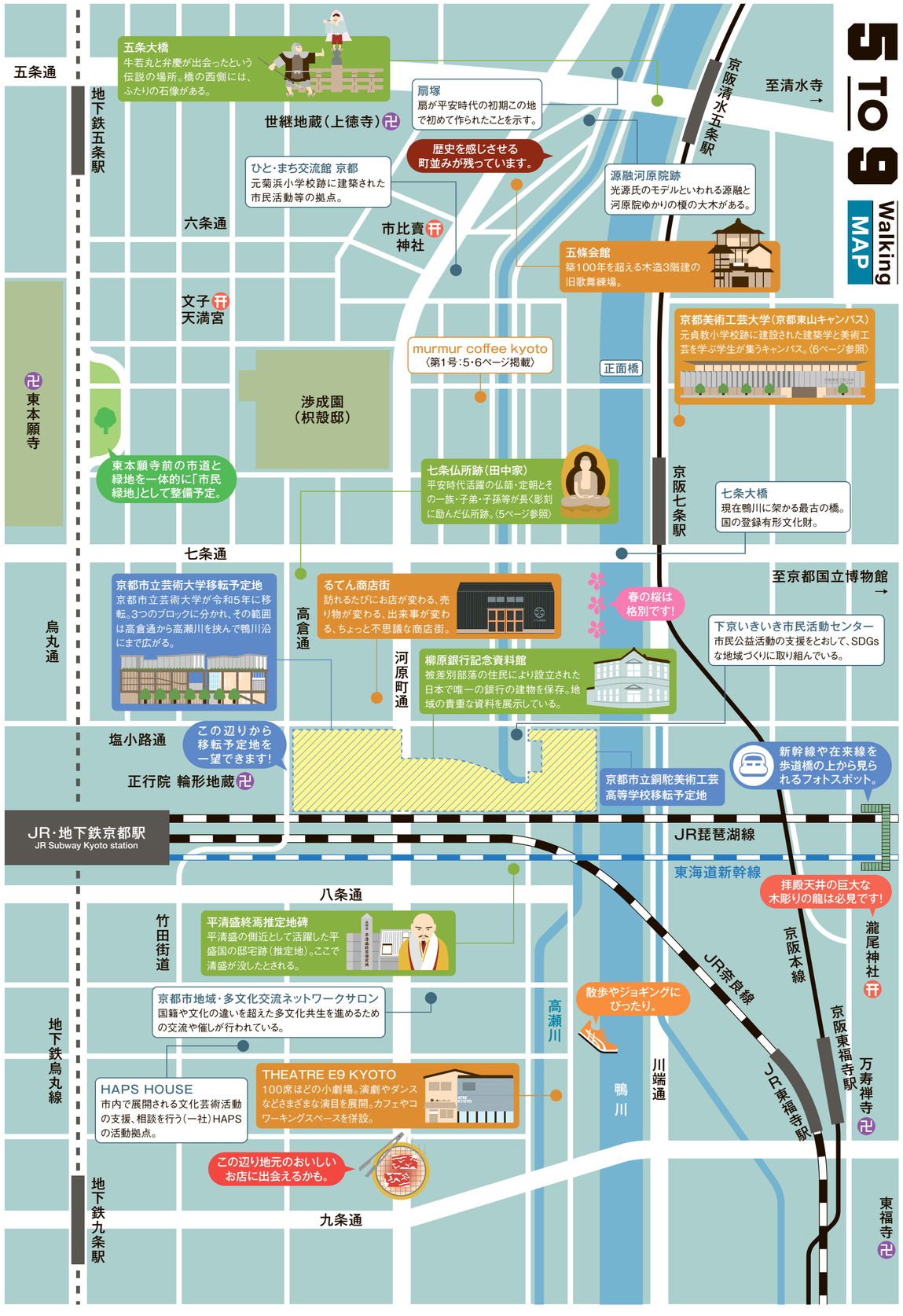
／お散歩しながら、このまちの文化と出会おう。／

5 TO 9 Walking MAP



京都駅東部エリアのカルチャーを発信。／5TO9（ゴートゥーナイン）／　プロジェクトマネージャー｜桜井 肖典（RELEASE;）　編集｜森田 利浩（実業広告社）　編集協力 あごうさとし（アーツシード京都）・小山田 徹（京都市立芸術大学）・田中 郁后（翠灯舎）・湊 三次郎（梅湯）・山内 一正（灰孝本店・murmur coffee kyoto）　執筆｜高島 夢子（editplus）・小鳴 弘之・津曲 克彦　アートディレクション・デザイン｜野田 孝弘（実業広告社）　撮影｜鈴木 誠一・谷口 哲　印刷｜株式会社シーズクリエイト　京都市印刷物第024786号（令和3年2月）発行／京都市総合企画局プロジェクト推進室　TEL.075-222-3176（土、日、祝を除く 午前8：45～午後5：30）FAX.075-213-0443

＊本誌記載内容の無断転載は御遠慮ください。

京都市 CITY OF KYOTO

京都駅東部エリアのカルチャーを発信。

5 TO 9

KYOTO East side Gojo-dori St. to Kujo-dori St.
CULTURE JOURNAL

vol. 02

| Special Interview |

西堀晋さんが語る カフェ、デザイン、そして地域。

移りゆくまちプロジェクト

アーティスト 寺本遥さんの地域と 作品づくりへの思い。

街のあの人、あの場所へ。

地域で育った樹木を 次の世代へつなげる、 アーティスト 山本麻紀子さんの挑戦。

街のあの人、あの場所へ。
from 京都市立芸術大学

学生が見出す町家再生の新たな可能性。

街のあの人、あの場所へ。
from 京都美術工芸大学

学生のアイデアを通じて街を活性化。

西堀晋さんが語る
カフェ、デザイン、そして地域。

じっくりと育っていく街を
そっと見守っていきたいですね。

A

B

撮影:有本真紀(写真ABCD)

Profile
西堀晋(にしぼりしん)
(工業デザイナー)
—
1966年生まれ。1989年武蔵野美術大学卒。1989年〜1998年松下電器産業(株)インハウスデザイナーとして9年間在籍。1999年〜2002年(有)シンプロダクツ代表フリーランスデザイナーとして4年間活動。2002年〜2012年Apple Inc. インハウスデザイナーとして10年間在籍。USにてShin Products LLCを立ち上げ現在に至る。ハワイ在住。

5 TO 9 Shin Nishibori talks cafes, design and the areas

Special Interview

デザインも、カフェも、人を幸せにする仕事。

令和元年10月、五条大橋西たもとのカフェ「efish(エフィッシュ)」が20年の歴史に幕を閉じた。デザイナーが店舗設計を手掛けるデザイナーズカフェの先駆けであり、川の景色を楽しみながらくつろぐリバーサイドカフェという新ジャンルを確立したことで名高い店だ。その「efish」をつくり、Appleの元デザイナーでも知られる西堀晋(にしぼりしん)さんに、かつて自分の店があった街について伺った。

「実はカフェをやろうと思ってこの街に来たわけではないんです。そのころ住む家を探すために京都中を回り、100軒目くらいで巡り合ったのが『efish』の建物でした。この辺りが『五条楽園』と呼ばれ、お茶屋ののれんの奥で金魚が泳いでいることも知っていましたが、そんな街の雰囲気も気に入って暮らし始めたんです」。カフェをやろうと思ったきっかけは「大家さんから建物の1階をほかの人に貸すという話が上がり、ならば自分が借りようと。新しい家には友だちがいっぱい遊びに来ていて、それならもっと多くの人が集まれる場をつくろうと考えたことです」。

デザインとカフェには共通点があるという。「デザイナーの仕事って、人にどうしたら幸せを感じてもらえるか考え続けることだと思うんです。カフェも同じで、それはコーヒーを一杯飲み、そこで過ごした時間が幸せだったと感じてもらうことを目指す仕事だと考えています」。

店のオーナーの愛情が、街をもっとすてきに。

実際にカフェを始めるとき、心に決めていたことがあった。「他のお店と同じような店をつくらないように、近くのあらゆるカフェや喫茶店に通いました。似たような店をつくるとほかの店に迷惑を掛けるだけだし、街のためにもならない」。そこに無い店をつくるという気持ちも大切だという。「例えばパン屋が無かったら、その街に暮らす人においしいパンを食べてもらおうと自分にしかできない店を立ち上げる。店をつくるなら、それぐらいの気概が必要だと思うんです」。そんな気持ちを伝えるためには店のサイズ感も重要だと考える。「自分の店も最初はそうでしたが、オーナーが一人で切り盛りできる範囲でやっている所に魅力を感じるんです。なぜなら、その人の愛情が塊となって伝わってくるから。きっと、ぼく以外にもそういう店が好きで応援したいと思う人はたくさんいるだろうし、そんな店が一つひとつ増えていくことで街はすてきになるんじゃないかな」。

オープン後しばらくの間、店に客はまったく来なかったという。しかし、気持ちがこもったカフェは少しずつ近所の人に親しまれ、やがて街の名所となった。

いたずらに変えず、今ある良いものを残す。

もちろん今も、自分の店があった街への思いは変わらない。「ここ数年の間に新しい店がたくさんできましたよね。今朝も『川間食堂』さんでご飯をいただいたし、『にこみ屋六軒』さんができたときはぼく好みの店なので本当にうれしかった。自分ではもう店を始めることはないと思うので、今は客としていろんな店の応援をしています」。

そして、街のこれからに胸を膨らませている。「京都市立芸術大学がこちらに来るのがとても楽しみなんです。芸大が来て、そのまわりで思いを持った人が一つずつ愛情を込めた場所を創っていくようなチャレンジが出来て、そしてそういう人を応援したいって人がまちにいっぱいいて、街を創っていくというのが理想的なのかな。芸大が来ることでデザイン的にとてもセンスがあったり、アートのようにどこか居心地がよかったりとこれまでにないタイプの店ができるかもしれないし、その中にはきっとオーナーの気持ちがダイレクトに感じられる店もあると思うので、そんな所がもっと増えたらいいなと期待しています」。

もっとも、大きな変化は望んでいないという。「この街は京都駅や四条河原町に近いのに、鴨川の自然を含めて街並みがあまり変わってこなかった。だからこれからも、今ある良いものをできるだけ残してほしいと思うんです。何年、何十年というスパンの中で多くの人によってこの街が大切に育てられていく。その過程をずっと、近くで見られたらいいんだけどな」。

C

D

5 TO 9 京都駅東部エリア

「移りゆくまち」プロジェクト

若いアーティストたちが京都市立芸術大学移転予定地を題材にしたアート作品を制作していく「移りゆくまちプロジェクト」において、作品づくりに名乗り出てくれた寺本遥（てらもとはるか）さんにお話を伺った。

人の営みや機微を感じられるようなものを残したい。アーティスト・寺本遥さんの地域と作品づくりへの思い。

寺本遥さん

大切にしたいのは、誰しもが大学移転の関係者、当事者になること。

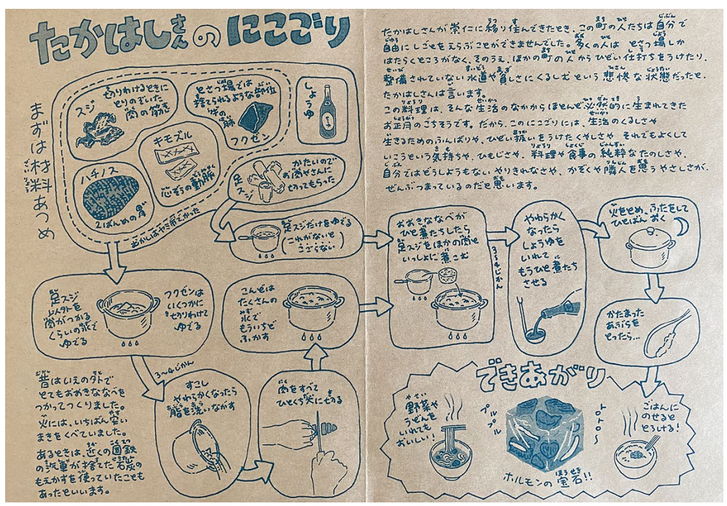
京都市立芸術大学大学院の美術研究科に通う寺本さんは、写真や映像を主としながら、様々な表現方法で作品を制作している。昨年度、元崇仁小学校で開催された大学の作品展では、自身の下宿先ー京都市立芸術大学（西京区大枝沓掛町）ー京都市立芸術大学の移転予定地を、ビデオカメラを片手に移動し、移りゆく景色を収めた作品を制作し、学生や地域の住民だけでなく、誰しもが大学移転の関係者、当事者になることを、映像をとおして伝えてくれた。

大学キャンパスの食堂でも地域の方との会話や繋がりが生まれていくことに期待。

昨年の夏頃から大学移転予定地に興味を持ち始めたという寺本さんは、卒業制作の一つとして、このまちに住むおばあさんから教わったすじの煮こごりのレシピを題材にした作品『たかはしさんのにこごり』を制作した。これをきっかけに、このまちに通うようになり、行きつけのお店もできたとのこと。「中には入りにくいイメージの店もありますが、すぐに受け入れてもらえました。誰かの入りやすい店なんだろうな」と笑顔で話す。続けて、「芸大生で、『この地域で何かやりたいな』と考えている人はきっと沢山いるけれど、『僕らを受け入れてもらえるかな?』という心配もある。以前、地域の人から、大学が移転してくるにあたって、キャンパスの中にできる食堂を楽しみにしているという話を聞きました。ぜひ食堂で隣に座った芸大生と話していただきたい。いいお天気やね、とかでいいんです。あと、いらないものが手元にあるときには、捨てる前に一度、芸大生に聞いてみてほしい。ほかの人がゴミだと思うものでも、芸大生にとっては宝の山に見えたりします」。そんな小さなきっかけから地域の人との会話が生まれ、ゆるやかに繋がりができていくことへの期待を語ってくれた。

思い出に触れ、手触りを感じる作品をつくりたい。

「今回の『移りゆくまち』プロジェクトでは、この地にかつて住んでいた人や今住んでいる人が思い出に触れる手がかりになる作品、またこれからこの地に関わる人が、この土地の手触りを感じられるような作品をつくっていきたいと思っています。」昭和6年に元崇仁小学校の校庭に植樹され、今は大学の移転を待つイチョウの木を題材にした作品は、令和3年3月の完成を予定している。作品が地域に展示される日を楽しみにしたい。



寺本さんが制作した作品『たかはしさんのにこごり』

5 TO 9

街のあの人、あの場所へ。

地域で育った樹木を次の世代へつなげる、アーティスト・山本麻紀子さんの挑戦。

山本麻紀子さん

元崇仁小学校で立体作品『巨人の歯』を制作。

ある特定の場所とそこに暮らす人に関わりながら、ドローイング、写真、刺繍といった多彩な形式で表現活動を行う、アーティストの山本麻紀子さん。「4年間、東九条に住んでいたことや立体作品『巨人の歯』を元崇仁小学校で制作したのもあって、この辺りは私にとって思い入れの強い地域ですね」。

地域で採取したサクラやミカン、フジなど20種以上の挿し木。

樹木の命と地域の人々の思いを挿し木にしてつなぐ試み。

そんな山本さんが京都市内の若手芸術家の支援を行うHAPS（ハップス）による「京都市文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」に携わることとなり、崇仁地域でプロジェクトを進めている。そのひとつが、京都市立芸術大学の移転工事によって失われる小学校や保育所等の樹木の枝を採取し、多くの地域の人々の思い出や願いとともに、挿し木にして育てる「崇仁すくすくセンター」だ。「このお話をいただいた頃、私自身が、身近な人の死に直面することが重なり『人の命も木の命も同じ命。私がしなければ木の命が途絶えてしまう』と考えた」と、当時の気持ちを振り返る。

挿し木を見守ってもらう機会をつくって地域の人と共に取り組む。

地域で採取した樹木は、サクラやナツミカン、フジなど、20種類以上に及び、京都府立植物園の樹木医などのアドバイスを受けながら、山本さんの試行錯誤の日々が続いている。「今後は、ご家庭や施設等に“挿し木の里親”になって挿し木を預かっていただき、その成長を見守っていただくプロジェクトを、地域の方々と一緒になって展開したいと思っています。育った樹木は大学敷地内をはじめ、崇仁地域とその周辺に、地域の方々と相談の上、植樹をする予定です。」

「巨人の歯と眠り」

山本さんは、日本とイギリスの巨人伝説のリサーチをもとに、平成25年から15年計画で、5年毎にテーマを設け、「巨人の世界」を探求している。その一環で、京都市立芸術大学移転に伴い解体される市営住宅や元崇仁小学校で、自身が制作した立体作品「巨人の歯」と共に眠りにつき、そこで見た夢や感じたことを作品にするプロジェクト「巨人の歯と眠り」を進めている。これから制作にかかる作品には、元崇仁小学校やその周辺で根付いていた草花から色をうつしかえた布や糸を用いるとのこと。地域の人々の思いが詰まった場所、大切にしてきた空間で見た夢が、どんな作品になるのか注目していきたい。

元崇仁小学校やその周辺で根付いていた草花で染色後の糸。

立体作品『巨人の歯』の制作の様子。

from

京都市立芸術大学

学生が見出す町家再生の新たな可能性。

～Tプロジェクトの試みをとおして～

田中家に残る希少な家具や器などの調度品をチェックする京都市立芸術大学の学生。

京都の玄関口・京都駅からほど近い七条高倉、かつての「七条仏所跡」にひっそりと佇む「田中家」は、明治後期の町家建築で、地域の自然、歴史、文化等からみて、その外観が地域の景観形成に重要な建築物に指定される景観重要建造物である。この田中家では、令和5年度に移転を控える京都市立芸術大学の学生たちが、町家の意匠や設えなどの学びを深めるとともに、制作した作品の展示など、建物の価値と融合した現代的な町家の再生に取り組んでいる。

●

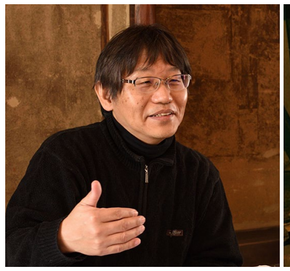
地域の町家が芸大生の学び舎に。

「T（寺子屋の頭文字）プロジェクト」と名付けられたこの取組について、設計会社で働きながら同大学大学院美術研究科博士課程に在籍し、このプロジェクトにマネージャーとして参加している信藤勇一（のぶとうゆういち）さんに話を伺った。「今もご自身が住まう町家が学生のアイデアを通じてさらに活用され、その経験が学生の成長にもつながって欲しいと願う家主の田中さん、しっかり保存された町家を生きた題材にして環境デザインを学びたいと思う学生、双方のデザインがマッチングして今回のプロジェクトが始まりました。田中家には建物としての価値はもちろん、箪笥（たんす）、長持（ながもち）など貴重な家財もたくさん残っています。これまでに週１回のワークショップで、建物の重要性や地域、歴史について幅広く学ぶほか、家主の田中さんから町家を住み継ぐ技術や知恵、棹秤（さおばかり）、行灯（あんどん）をはじめ古い道具や民具の使い方を教えていただきました。田中家として初の一般公開でもある2月の展示会『田中家コレクション展（七条町家ものがたり）』では、田中家に今も残っている食膳、椀、茶碗、燭台などの希少な調度品の展示や、奥庭を挟んで建つ土蔵内でデジタル映像を投影するプロジェクションマッピング（切り絵アニメーションを用いた空間演出）の上映などを行いました」。

芸大生の感性で紡ぐTプロジェクトのゆく先。

「数多くの町家が残る京都では、数々の町家再生の取組が行われています。多くの場合は、宿泊施設など、町家の活用に相応しい用途をあらかじめ決めていて、そこに建築家やデザイナーの考えが入り込んできます。今回のプロジェクトは目的を定めずにスタートを切っており、町家を知らない若い学生世代の豊かな感性や多角的な見方で自由に手を加えていくことで、町家の保存・活用の可能性を広げていこうと思っています。」と、信藤さんは話す。令和2年度からスタートしたTプロジェクトだが、信藤さんは続けていくことが大切だという。「令和5年には大学も移転してくるので、このプロジェクトを続けて、学生と一緒に未来の町家の姿を探求し、新たな保存・活用の手法を試みていきたい。そして、大学の移転後に振り返ったときに、この田中家が、その原点として立ち戻れるような場所になっているとうれしいですね。」と語る。まちに小さな化学変化を次々と起こす学生たちの活躍に期待したい。

田中家



信藤勇一さん

深海に眠る宝物を探すイメージで田中家の蔵に投影されるプロジェクションマッピング。

家主の田中さんとTプロジェクトに参加する京都市立芸術大学の学生。

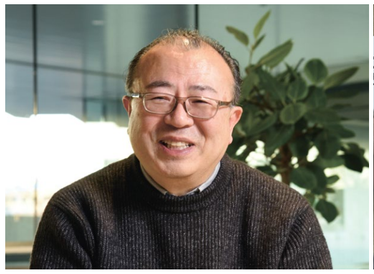
地域と一緒に七条エリアの豊かな魅力を発信。

七条通応援キャラクター『レインボーちゃん』
制作:
京都美術工芸大学
濱井春海

世界と京都をつなぐ玄関口、京都駅から七条通を東へ進むと、鴨川、三十三間堂、京都国立博物館など、東山の文化ゾーンが広がる。このエリアの元貞教小学校跡地に、平成29年4月、京都美術工芸大学東山キャンパスが開校した。同大学では、デザイン・建築・工芸の各分野で世界に発信できる人材の育成や、地域との交流に積極的に取り組んでいる。「大学が地域と一緒にプロジェクトを行うのは、今や当たり前の時代」と語るのは、工芸学部美術工芸学科長を務める中井川正道（なかいがわまさみち）教授。「昨年から参加している、商店街と京都市が主催する『京都駅東部エリア 京都七条通スタンプラリー&アートフェスタ』では、京阪電車の最寄駅や商店街の店舗を彩る作品を制作しました。また、七条通応援キャラクター『レインボーちゃん』は学生たちがデザインしたいくつかの候補の中から、商店街の方に選んでいただいて、誕生しました。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響でスタンプラリーが中止となってしまいましたが、これからも、地域と交わりながら学生のアイデアを通じて街の魅力を高め、発信していきたいですね。」

学生の目線で課題を解決、街のお悩み事も引き受けます。

今年度は誰もが安心して観光を楽しめるまちの実現を目指した「京都・東山観光おもてなし隊」の活動にも参加している。そのひとつが、車椅子で通行しやすい道などが記された東山区の観光バリアフリーマップの制作だ。「坂道が多い東山区の高低差が一目でわかるようなデザインをはじめ、区役所の担当者が驚くほど創意工夫に満ちた案が出ています」。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の防止にむけた対応をアイコン化し、お店の方が指さすだけで外国人観光客に簡単に伝えることができる『指さしアイコン』の制作も進んでいる。「デザイン」と聞くと敷居が高いように聞こえるが、中井川教授は「そんなことはないですよ」と笑顔で否定する。「デザインとは、依頼者のオーダーを受け、そこにある課題を自分の視点で見つめ、最も良い解決策を考えて形にすることだと考えています。私は『大学と地域の理想的な関係』とは、地域からの注文を受けた学生のアイデア・取組を通じて、地域が豊かになっていくことだと思っています。学生にとっても、発注者の依頼にしっかり応えていくことは、将来、デザインの世界で活躍していくための一番の経験です。また、より長期的な視点で見れば地域で経済が活性化し、活力が出れば、卒業後も京都に留まって活動する若者が増え、地域の後継者不足の解決にもつながると信じています。」学生ならではの視点を活かした商品開発など、どんな相談にも気軽に応じていきたいとのこと。地域の人々と一緒にこの街を活性化したい、そんな思いが溢れていた。



お話を伺ったのは、京都美術工芸大学 工芸学部 美術工芸学科長を務める中井川正道教授。

車椅子で通行しやすい道などが記された東山区の観光バリアフリーマップ。

外国人観光客にも一目で新型コロナウイルス感染症の感染拡大の防止にむけた対応を伝えられる、商店向け『指差しアイコン』の試作品。

from

京都美術工芸大学

学生のアイデアを通じて街を活性化。

―京都美術工芸大学と地域の交わり方―